

Bookstart Newsletter



ブックスタート・ニュースレター



© Photographer Rami Lappalainen / Lukukeskus

フィンランド

特集

「ネウボラ」の国のブックスタート ～フィンランド～

スカンジナビア半島に位置する北欧の国、フィンランド。国際NGO（非政府組織）セーブ・ザ・チルドレンの「お母さんにやさしい国ランキング」で世界一に選ばれるほど、子育て支援が充実していると言われています。

特に最近日本でも注目が集まっているのが「ネウボラ（Neuvola、相談の場）」の意味」と呼ばれる施設。地方自治体が運営し、妊娠期から子どもの就学前までの期間、母子とその家族を支援する拠点です。一か所で切れ目のないサポートを提供し、育児不安や虐待を予防したり、適切な支援を早期に提供したりすることで、子どもの健やかな成長を促します。

そのフィンランドで、2019年からブックスタートの試験実施が行われています。実施の場所は、もちろん全国に点在するネウボラです。

ブックスタートのグローバル・ネットワーク（P3）にも参加している、推進団体「フィンランド読書センタール」のエミ・ヤッコ（Emmi Jätkö）さんに、ネウボラとの連携や保健師からの評価、試験実施の開始から約1年がたった現在の様子について話をうかがいました。

が遅くなっており、子どもにとって「話いじ」「理解すること」が難しくなっていると感じる。

● 親が「赤ちゃん言葉」を多く話すために、子どもがきちんとした言葉を学ぶ機会を奪っているのではないかと。本を読む家庭はたくさん読むが、読まない家庭はまったく読まないという傾向が近年高まっていると感じる。

● 一緒に本を読むよりも、タブレットやiPadを使っている時間が多いのではないかと。

こうした意識を持っていた保健師たちは、ブックスタートを実施する意義を、次のように考えたようです。

● 家庭間の読書量の差が小さくなる。

● 家庭で本を楽しむ時間が増える。

● 専門家の書いた豊かな言葉を用いた絵本を読むことは、子どもの言語発達にも良い影響がある。

また保健師は、子どもと落ち着いた時間を過ごすことを難しく感じている保護者にとって、絵本の時間は親子の関わりを深め、強めるものになるだろう。そして非常に厳しい家庭状況にある子どもにとっては、読書がその子を支えるものにもなりうるだろうとも考えていました。

いまこれから

私は先日、年に一度開催される「ネウボラ・フェア」というイベントでブックスタートを紹介しました。そこで出会った保健師たちは、口をそろえて「本を返さなくても良いことを、最初は信じてもらえなかった」「親子が再度ネウボラを訪れる際に、絵本を読んだときの様子を聞かせてくれる」「ブックスタート・パックを受け取った親子が本当にうれしうだった」と話してくれました。私の耳にはそれが、まるで素晴らしい音楽のように聞こえました。

今後の課題は、赤ちゃんに「パックを贈る」というきっかけを作ったあとに、どのように、子どもの成長に合わせて継続的にメッセージを届けることができるかということとです。保育園や幼稚園、他の専門機関との連携が、さらに不可欠になってくることでしょう。

昨年から開始した全国規模の試験実施は、3年間の計画です。フィンランド文化財団からの財政支援が終了した後は、政府か地方自治体が事業費を支出する形で、ネウボラが事業を継続していくことを目指しています。



© Photographer Rami Lappalainen / Lukukeskus

ブックスタートのグローバル・ネットワークとは

2018年、イギリスの推進団体ブックトラストの呼びかけで、「赤ちゃんに絵本を贈る活動」の世界的なネットワークの構築が始まりました。フィンランドや日本もそのメンバーとなり、世界各国のメンバーとウェブ会議などを通して情報交換を行っています。

人たちとのつながりをも作りだそうとしていることに、憧れと尊敬の気持ちを抱くのです。

ネウボラは、フィンランドの子どものいる家庭のほぼ100%が利用する施設です。高い利用率の理由は、有給の産休（産前産後休業）などと同様に、社会福祉サービスを受けることが国民の義務になっているからです。妊娠が分かると、母親は（ときには父親や、赤ちゃんのきょうだいも一緒に）妊娠中に約10回、産後に約15回の定期健診や発達相談を受けるために、ネウボラを訪れることになります。

私たちは、ブックスタートの計画段階から、必ずネウボラと連携しよ

うと思っています。ブックスタートは、家庭の経済的、社会的背景に関わらず、平等に「すべての赤ちゃん」に届くことが最も大切だと考えられます。ネウボラは全国すべての赤ちゃんとの接点を持つ、唯一の施設です。私たちは読書推進団体でありながらも、図書館でブックスタートを行うことは、はじめから検討しませんでした。

フィンランドの子育て支援事業のひとつに、出産予定日の数週間前に届く、有名な「赤ちゃんボックス」のプレゼントがあります。赤ちゃんの毎日の必需品（服、おむつ、爪切り、ヘアブラシ、体温計、おしゃぶりなど）が大きな箱いっぱいに入っています。

半年間で年間出生数を超える注文

こうしてブックスタート・パックは、赤ちゃんが1歳になるまでの間にネウボラで手渡ししてもらうことになりました。ただ、私たちにはひとつ心配なことがありました。定期健診で何を行うかは、すべて法律で定められているため、保健師はそれをもれなく実施するためにいつもとても忙しくしています。どこにも実施が定められていないブックスタートは、関心を持ってもらえない、または歓迎されない可能性があったのです。

保健師の高い関心

また、私たちは活動の開始前に、保健師を対象に意識調査を行いました。すると驚いたことに、彼らは最初からブックスタートに高い関心を持ってくれたのです。それには理由がありました。

「意識調査に寄せられた声」

● 以前と比較して、子どもの言語発達



© Photographer Rami Lappalainen / Lukukeskus
ブックスタート・パック
絵本／ガイドブック／わらべうたが書かれたカード／身長計が入っています。

ところが社会保健省の社会サービス及び家庭部局から、すべてのネウボラに、ブックスタートへの参加と協力を呼び掛ける手紙を出し、保健師が読む専門誌に広告も載せて2か月もすると、なんと全国から3万5千パックの注文が入ったのです。そして6か月が経つ頃には、その数は年間出生数の5万人を上回る、6万5千になりました。



お話をうかがった方

ブックスタート推進団体
フィンランド読書センター

エミ・ヤッコさん
Emmi Jäkkö



DATA 2019年ブックスタートの試験実施を開始
人口：約551万人（2018）
出生数：5.5万人（2015）



image: Freepik.com



赤ちゃんボックス
たくさんのグッズが入った箱は、赤ちゃんのベッドにもなるように設計されています。

実は、ブックスタートの絵本を赤ちゃんボックスに入れることを検討したこともありましたが、その案はすぐになくなりました。絵本や情報資料が様々な品物の中に埋もれてしまったり、まったく注意を払われなくなってしまうからです。

海外ルーツの親子と言葉 母語での子育て、応援を

NPO 法人青少年自立援助センター
定住外国人支援事業部責任者

田中 宝紀



海外にルーツを持つ子どもの学習支援教室

これまで、700 名以上の日本語を母語としない子どもと関わってきました。国も母語も日本にやってきた年齢や理由も様々な子どもたちです。そんな多様なバックグラウンドを持つ子どもたちとの出会いの中で感じているのは、「母語」の大切さです。

海外にルーツを持つ子どもたちの場合、家庭の中で使われている言葉（母語）と、家庭の外で使われている言葉（日本語）が異なることが少なくありません。複数の言葉に囲まれながらバイリンガルとして成長することは、一般的に知られているほど簡単ではありません。家庭の状況や子どもたちを取り巻く環境によっては、母語も日本語も十分に使うことができない「ダブルリミテッド」や、母語を完全に喪失し、日本語しかできないのに日本語の力が十分に伸びない「シングルリミテッド」と呼ばれる状態に陥ることもあるのです。

そうした子どもたちの中には、抽象的概念の獲得に困難を抱えたり、深い思考が苦手となるケースがあります。日本語でも母語でも十分に表現する力を持てないまま思春期を迎え、言葉にできない思いを自分や他人を傷つけることで解消しようとする子どももいます。

また、日本語がわからない親と、日本語しかわからない子どもとの間で会話が成立せず、親子関係に亀裂が生じることがあります。幼少期には簡単な日本語でのコミュニケーションで済ませることができた親子の会話も、年齢が上がるにつれて進路の話や友人関係の悩みなど、深い会話を必要とする場面が増えてきます。こうした場合に、「どうせ親に相談し

ても日本語が通じないから」と諦めてしまうのです。外国人保護者にとっても、わが子の話している日本語がよく理解できないという状況が、どれほど苦しいものか。想像に難くありません。

外国人保護者の方とお話すると、保育園の先生や日本人の配偶者などから、「〇〇ちゃんの日本語がもっと上手になるように、家の中でも日本語で話しかけてくださいね」や「日本語で絵本を読んであげてくださいね」などと言われた経験を持つ方がいます。善意の“アドバイス”なのかもしれませんが、日本語力が十分でない外国人保護者にとっては、それがしたくても困難であることはもちろん、かえって子どもの健全な言語発達そのものを阻害したり、親子の共通語を奪ったりすることがあるかもしれません。子どもに関わる人たちは、そうした点をよく知っておく必要があります。

今後、日本で子育てをする外国人保護者の増加が見込まれています。すべての親御さんが、安心して、自信を持って子どもたちを育てることができるよう、海外にルーツを持つ子どもたちの言葉の育ちを、外国人保護者と共に、社会全体で応援していけたらと願っています。

田中 宝紀（たなか いき）

NPO 法人青少年自立援助センター定住外国人支援事業部責任者。「多様性が豊かさとなる未来」を目指して、海外にルーツを持つ子ども・若者の学習と就労を支援。2019 年度文科省外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議委員。



コトコト **ことのほ**

—— スタッフが出合った言葉

バカボンのパパではないですが、根元のところで「これでいいのだ！」と開き直って、こどもの個性を楽しむのが、やはり子育ての基本なんだろうと思います。

子どもがやんちゃでも、おとなし過ぎても心配なのが親というもの。でも、その心配を子どもにぶつけ何とかしようとする、それはネガティブなメッセージとして伝わってしまうと発達心理学者は言います。自分らしさを発揮して子どもたちが生きられるよう、その存在を丸ごと認められる大人でありたいですね。＊「親になるまでの時間 前編」（浜田寿美男 著 / ジャパンマシニスト社）